

下穂積遺跡 1

令和2年（2020年）3月



茨木市教育委員会

序 文

私たちの住む茨木市は、大阪と京都の間の交通の要衝に位置するとともに、北は老の坂山地、西は千里丘陵、南は大阪平野がそれぞれ広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境となっています。

市域は古くからの主要な街道である三島街道が南北に、西国街道が東西に通っていました。現在においても名神高速道路や近畿自動車道、国道 171 号線などの幹線道路が市内を貫いており、本市の交通の要衝たる特徴は今日にも受け継がれています。北部の山地には豊かな森が残り、南部には山地を源流とする勝尾寺川・茨木川・安威川などの河川により、肥沃な平野が形成されてきました。

このような豊かな自然環境と地理環境に恵まれた本市域には、古来より多くの人々が生活を営んできました。その先人たちの足跡の多くが、土中に埋もれた埋蔵文化財として残されています。

本書で報告する下穂積遺跡は千里丘陵の東端、市域を南北に縦断する三島街道の西側にあたり、市の中心部を望む場所に位置し、今回の調査によって新たに確認された遺跡です。

現地調査では、平安時代の溝や柱穴など多数の遺構が見つかりました。今回の発掘調査によって、茨木市の古代の様相を明らかにするうえで新たな知見となる貴重な成果を得ることができました。

最後に、今回の調査を実施するにあたりまして、多大なご協力とご配慮をいただきました土地所有者、近隣の皆様をはじめとする関係各位に対し、深く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 2 年 3 月 31 日

茨木市教育委員会

教育長 岡田 祐一

例 言

1. 本書は平成26年度に実施した茨木市下穂積三丁目に所在する下穂積遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は事業者からの届出・依頼を受け、茨木市教育委員会が行った。
3. 発掘調査は以下の体制で実施した。
教育総務部 社会教育振興課長 森岡恵美子、文化財係長 前田聡志
発掘調査員 藤田徹也・坂田典彦・齊藤大輔
担当者 齊藤大輔、嘱託調査員 木村健明
〔遺物整理〕
担当者 木村健明
4. 本書で用いた現地写真は齊藤大輔が撮影した。また、空中写真測量は株式会社島田組が行い、遺物写真の撮影に関しては、木村健明が行った。
5. 本書の執筆・編集は、木村健明が行った。
6. 現地調査、報告書の作成にあたっては、以下の諸機関より様々なご協力・ご指導を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略）。
日東電工株式会社
7. 本調査に係る記録類や出土遺物は、茨木市立文化財資料館〔〒567-0861 大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 電話（072）634-3433〕において保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書に記載された測量成果については、世界測地系（測地成果2000）に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標第VI系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。
2. 標高は東京湾平均海面（T.P.+）値で示した。単位は全てmである。
3. 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000地形図）を拡大、縮小、加筆して使用したものである。
4. 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面はシートで被覆するなどして、湿った状態を保つように留意した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられるWentworthの粒径区分を使用した。
5. 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。
6. 遺物観察表の法量記載における（ ）は推定復元値、△は残存値を示す。
7. 本書における遺構、遺物の時期決定は以下の文献を主な参考としている。
古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』
古代の土器研究会編 1993 『古代の土器2 都城の土器集成II』
古代の土器研究会編 1994 『古代の土器3 都城の土器集成III』
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
菅原正明1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』同朋舎

目次

序文

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 調査の経緯	1
第Ⅱ章 位置と環境	2
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 基本層序	5
第2節 遺構と遺物	5
第Ⅳ章 総括	17
出土遺物観察表	18
検出遺構一覧表	20
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 調査区位置図	図8 第1面遺構平面図・断面図(1)
図2 茨木市地質図	図9 第1面遺構平面図・断面図(2)
図3 茨木市遺跡分布図	図10 第1面遺構出土遺物実測図
図4 調査区土層断面図	図11 5-1a層出土遺物実測図
図5 4-1a層出土遺物実測図	図12 第2面平面図
図6 第1面平面図・遺構断面図(1)	図13 第2面遺構出土遺物実測図
図7 第1面平面図・遺構断面図(2)	図14 第2面遺構平面図・断面図

表目次

表1 出土遺物観察表(1)	表3 検出遺構一覧表
表2 出土遺物観察表(2)	

写真図版目次

- | | | | |
|------|----------------------|------|---------------------|
| PL.1 | 1. 調査区遠景（南東から） | PL.4 | 1. 4-1a層出土遺物（須恵器） |
| | 2. 第2面全景（西から） | | 2. 4-1a層出土遺物（土師器ほか） |
| PL.2 | 1. 東壁土層断面（西から） | PL.5 | 1. 第1面ピット出土遺物 |
| | 2. 西壁土層断面（東から） | | 2. 第1面溝出土遺物 |
| | 3. 第1面遺構集中部完掘状況（東から） | PL.6 | 1. 5-1a層出土遺物 |
| PL.3 | 1. 第1面遺構集中部完掘状況（北から） | | 2. 第2面遺構出土遺物 |
| | 2. ピット16断面（南から） | | |
| | 3. 溝6断面（西から） | | |

第I章 調査の経緯

第1節 調査の経緯と経過

本遺跡は下穂積三丁目に所在する。当該地は、平成26年2月に実施した試掘調査によって、遺構・遺物といった埋蔵文化財が認められたことから、新たに下穂積遺跡として周知されたものである。遺跡の範囲は、およそ東西120m、南北110mの範囲に及ぶ。本調査は、遺構・遺物の確認されたT7・T8を中心とした990㎡を対象として実施することとなった(図1)。

なお、敷地の西側(T12～14の部分)に関しては、『新修茨木市史』第八巻で池の表記があり、近代の池が所在したと考えられ、かつ、試掘調査においても遺構が検出されなかったことから、埋蔵文化財包蔵地に含まれていない。

本調査は、平成27年4月14日から5月28日(実働26日)の期間で行った。

まず機械掘削を行ったところ、想定以上に以前の建物による攪乱が激しく、遺構面を確認できたのは、建物間の道路部分であった「T」字状の部分にほぼ限られた。ただし、南側では遺構面の一部が攪乱の間に島状に残存しており、部分的ながら遺構が確認された。

[参考文献]

茨木市 2004『新修茨木市史』第八巻 資料編 地理

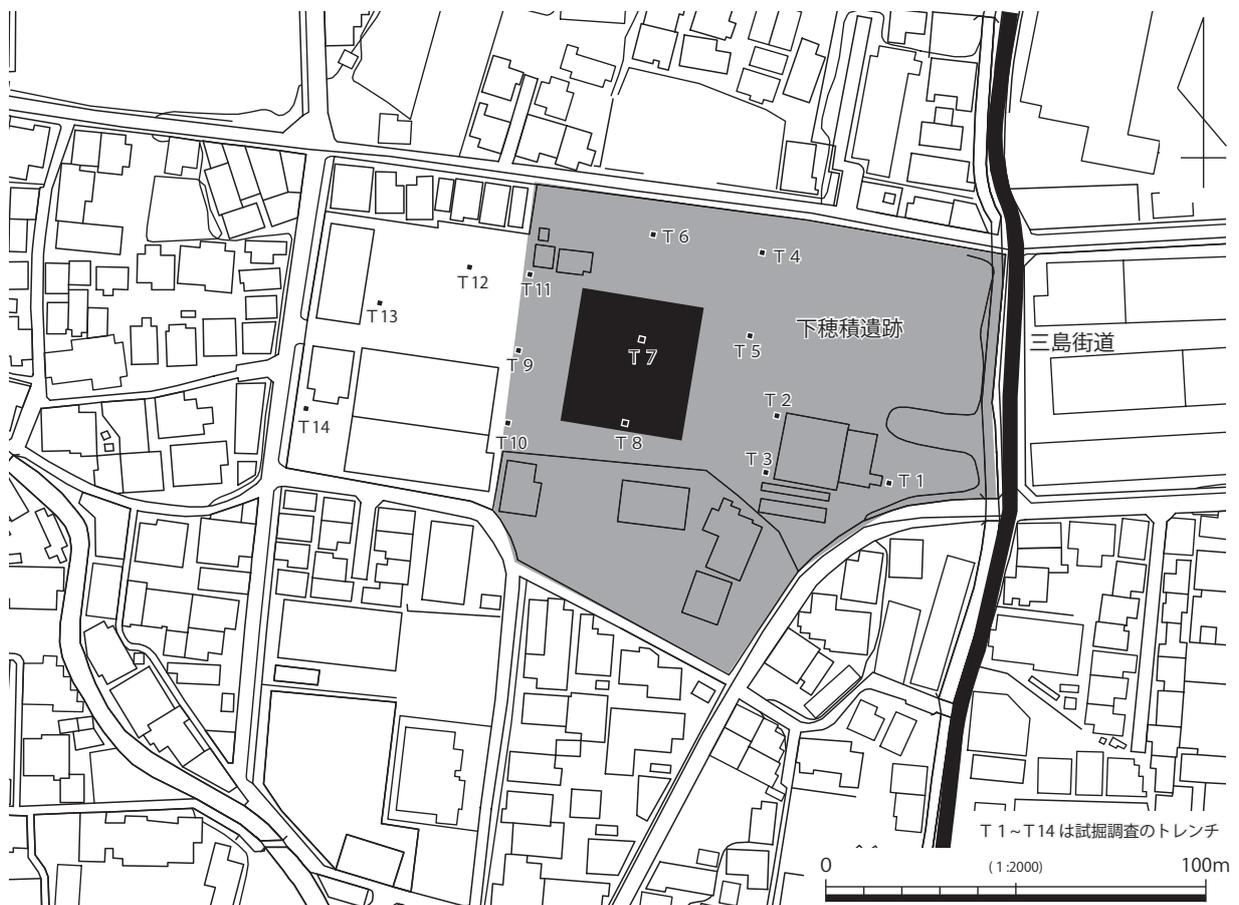


図1 調査区位置図

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

下穂積遺跡の所在する茨木市域は、北東－南西方向に走る有馬－高槻構造線によって、大きく南北二つに区分される。北部は更に馬場断層と箕面断層によって三つに区分されるが、概ね標高 300 m 前後の秩父古生層系の岩石により構成される北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなる。

南部の西側は標高 50 ～ 100 m 前後の千里丘陵が所在する。千里丘陵は、前期洪積層の隆起地形の一つである大阪層群で形成される。

南部の東側及び南側は淀川や安威川等の河川によって形成された沖積層からなる三島平野が広がっている。

下穂積遺跡は市域南西部の千里丘陵東端に位置し、遺跡の東側は平野部に下る傾斜地となっている。

第2節 歴史的環境

下穂積遺跡の所在する千里丘陵東麓周辺の人々の活動痕跡は、郡遺跡などから出土したナイフ形石器によって旧石器時代後期に遡ることが判っている。

縄文時代には、草創期の有茎尖頭器が中条小学校遺跡、前期の大歳山式土器が東奈良遺跡で出土している。更に晩期には遺物が出土する地点が増加する（木村 2019）。

弥生時代になると東奈良遺跡・中条小学校遺跡や、郡遺跡とその周辺の倍賀遺跡・春日遺跡・中河原遺跡などで集落や墓域が確認されている。特に東奈良遺跡では、銅鐸・銅戈・ガラス勾玉・ガラス小玉の鋳型、送風管など鋳造関連遺物が出土しており、青銅器及びガラス製品の一大生産地であったことが窺われる（茨木市 2014・茨木市立文化財資料館 2017・清水 2017）。

古墳時代には集落や須恵器窯、古墳などが営まれる。集落では郡遺跡とその周辺の倍賀遺跡・春日遺跡や東奈良遺跡等で竪穴住居跡が確認されている。

須恵器窯は、千里丘陵では、主に吹田市域と豊中市域に構築されているが、茨木市内でも後期の窯跡が茨木ゴルフ場内で確認されている（清水 2014）。

古墳は、前期から終末期にかけて市内各地に築造されている。下穂積遺跡周辺では、中期の古墳群が春日遺跡・中条小学校遺跡などで検出されている。

古代には、茨木市域は嶋下郡に相当し、郡遺跡周辺に島下郡衙、殖村駅家が存在したと考えられている。更に、太田廃寺跡・穂積廃寺跡・三宅廃寺等の寺院が建立されている。ただし、いずれもその実態は明確になっていない。また、現在に法灯を伝えるものとして総持寺がある。

また、山陽道が東西方向に、南北方向に三島路が通っていた（鈴木・濱野 2002）。前述した各施設は、



図2 茨木市地質図

第Ⅱ章 位置と環境

これらの道路沿いに建てられたと考えられる。

また中世には、玉櫛遺跡、東奈良遺跡、郡遺跡などで集落が検出されている。また、戦乱が頻繁に起こっていたこの時期に築かれた中世城館として、郡山城、穂積城、三宅城・茨木城などが築かれているが、いずれも実態は明確になっていない。

近世には茨木城が元和元年（1615年）の一国一城令を受けて廃城となった後に、茨木城下町が在郷町として発達し、現在の茨木市の中心部となっている。

[参考文献]

茨木市 2014『新修茨木市史』第七巻 資料編 考古

茨木市 2004『新修茨木市史』第八巻 資料編 地理

茨木市立文化財資料館 2017『銅鐸をつくった人々―東奈良遺跡の工人集団―』

木庭元晴 2012「基盤地質」「山地と平野の地形のしくみ」『新修 茨木市史』第一巻通史Ⅰ 茨木市史編さん委員会

木村健明 2019「茨木市における縄文時代遺跡の様相―安威古墳群出土縄文土器の紹介をかねて―」『茨木市立文化財資料館館報』第4号 茨木市立文化財資料館

清水邦彦 2014「古墳時代後期の茨木」『新修 茨木市史年報』第12号 茨木市史編さん委員会

清水邦彦 2017「弥生時代鑄造技術と工人集団 - 近畿地域出土送風管の検討を中心に -」『日本考古学』第44号 日本考古学協会

鈴木雅美・濱野俊一 2002「摂津国嶋下郡における地方官衙遺跡についての一考察」『大阪文化財研究』第21号

第三章 調査の成果

第1節 基本層序

調査区の南側及び北側は攪乱が著しく、層序の確認ができなかったため、中央部の東西壁面において層序の確認を行った。東壁では、1. 盛土（層厚 0.34m・0-1a 層）、2. 黒褐色粘質シルト（層厚 0.12m・旧耕土層、1-1a 層）、3. 灰オリーブ色粘質シルト（層厚 0.08m・2-1a 層）、4. 暗灰黄色微砂混じり粘質シルト（層厚 0.06m・2-2a 層）、5. 灰色粘土（層厚 0.22m・3-1a 層）、6. オリーブ黒色粘土（層厚 0.16m・4-1a 層）、7. 黄褐色粘土（第1面ベース層・層厚 0.1m・5-1a 層）、8. オリーブ褐色粘土（層厚 0.18m・6-1a 層）、9. にぶい黄褐色粘土（地山・7-1b 層）であった。一方、西壁では4～6・8が認められなかった。第1面は4-1a層下面、第2面は6-1a層下面でそれぞれ調査を行った。

調査地は西から東へ傾斜する地形であり、後世に削平を受けていると考えられる。現地表面は東側で19.2 m、西側で19.6 mを、第1面は東側が18.4 m、西側で18.8 m、第2面は東側が18.1 m、西側が18.6 mをそれぞれ測る。

第2節 遺構と遺物

4-1a層出土遺物（図5）

4-1a層から土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・瓦質土器が出土した。その内、21点を図示した（1～21）。時期は8世紀中葉から12世紀代に及ぶ。

1・2は土師器である。1は椀で、底径7.0cmを測る。断面三角形の高台をもつ。2は皿で、口径15.0cm、器高1.8cm、底径13.0cmを測る。口縁端部内面に凹線1条を施す。

3～11は須恵器である。3は蓋で、口径16.0cmを測る。水平な天井部と屈曲して面をなす口縁部をもつ。内外面に回転ナデを施す。4～6は杯である。いずれも内外面に回転ナデを施す。4は底径10.8cmを測る。断面台形状の高台をもつ。5は底径12.6cmを測る。6は口径15.8cmを測る。口縁端部は丸く収める。7～10は壺である。7は底径6.6cmを測る。底部外面はヘラ切り未調整、体部内外面及び底部内面に回転ナデを施す。8は底径10.2cmを測る。「ハ」字状に開く高台をもつ。内外面に回転ナデを施す。9は口径19.0cmを測る。口縁端部は上下に拡張し面をなす。10は口径10.2cmを測る。短く外反する口縁部をもち、端部は丸く収める。内外面に回転ナデを施す。11は甕である。口縁端部は上方につまみ上げる。内外面に回転ナデを施し、内面に自然釉がかかる。

12～14は黒色土器椀である。12はA類である。底径9.2cmを測る。断面長方形の高台をもつ。13・14はB類である。13は口径14.0cmを測る。口縁端部内面に沈線を施す。外面にナデ、内面にミガキを施す。14は口縁端部内面に沈線を施す。

15は灰釉陶器皿である。口縁端部は外方へ肥厚する。内外面に回転ナデを施し、内面に釉がかかる。

16～20は土師質土器羽釜である。いずれも短い口縁部と水平に短く伸びる鏝をもつ摂津C型である。16は口径13.0cmを測る。18は鏝が他と比べて分厚くなっている。19は内外面にナデを施す。20はやや長めの口縁部と短く水平に伸びる鏝をもつ。鏝端部は丸く収める。

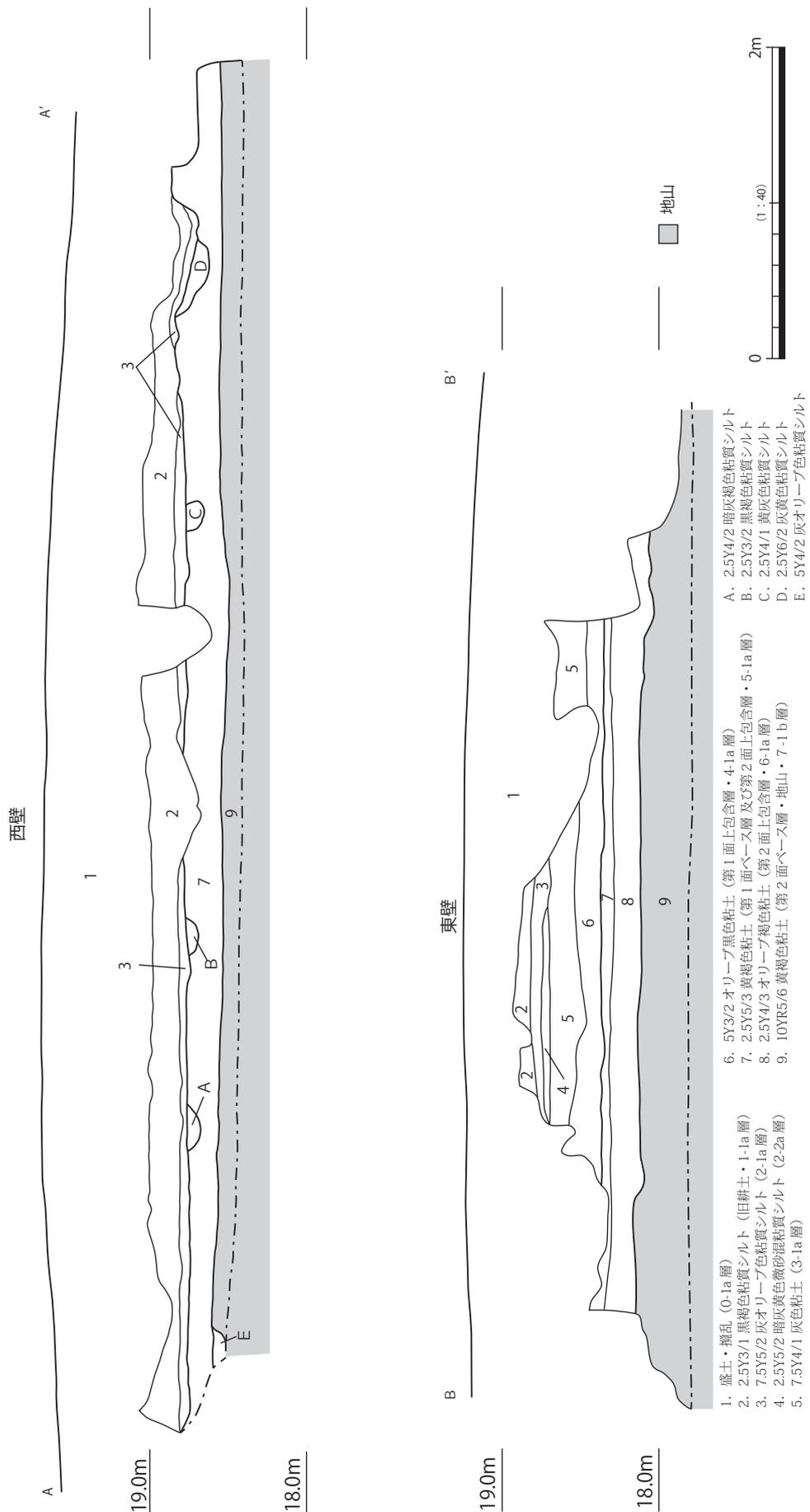


図4 調査区土層断面図

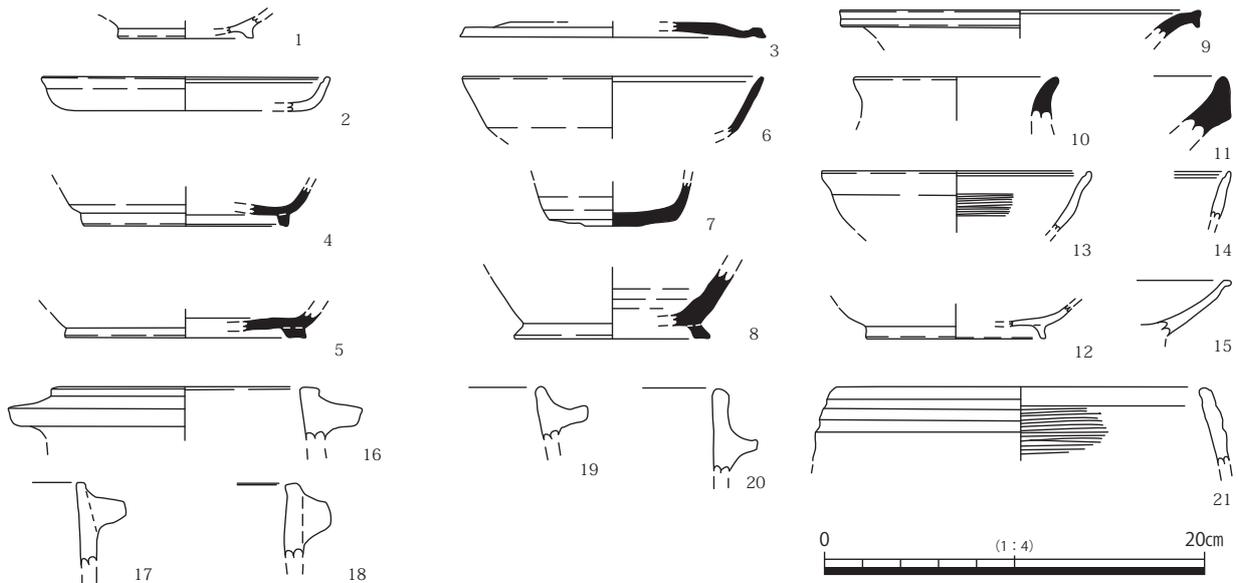


図5 4-1a層出土遺物実測図

21は瓦質土器羽釜である。口径19.2cmを測る。外面に凹線2条、内面にハケを施す。口縁端部は丸く収める。

第1面の遺構・遺物

ピット21基、溝7条を検出した。各遺構の平面・断面図は図6～9に掲載したが、特徴的な遺構及び、出土遺物を掲載した遺構についてのみ以下で詳述する。その他の遺構については、規模等を表3に記載する。出土遺物は破片が多く、詳細な時期を判断し難いが、概ね10世紀中葉を中心としており、遺構の時期も同様に考えられる。

ピット ピットは散在した状態で建物としてのまとまりは把握できない。

ピット2 (図8) 直径0.26m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色土、明黄褐色土が混じる黒褐色土の2層である。黒褐色土は柱痕と考えられ、底に石を置く。遺物は出土していない。

ピット4 (図9) 東側を溝3、北側を攪乱に切られる。長径0.24m以上、短径0.2m以上、深さ0.22mを測る。埋土は黄灰色土の単層である。土師器が出土した。その内、1点を図示した(図10-22)。

22は土師器甕である。口縁端部は面を成す。内外面にヨコナデを施す。

ピット6 (図8) 溝3の西側に位置する。長径0.33m、短径0.26m、深さ0.3mを測る。埋土は灰色土(柱痕?)、オリーブ色土の2層である。遺物は土師器・須恵器・黒色土器が出土した。その内、2点を図示した(図10-23・24)。

23は土師器皿である。口径13.6cmを測る。口縁端部は外方へつまみ出す。内外面にヨコナデを施す。

24は黒色土器A類碗である。口径14.8cmを測る。口縁端部は上方につまみ上げる。内面にミガキを施す。

ピット7 (図8) ピット8・9に切られる。直径0.34m、深さ0.32mを測る。埋土はオリーブ黒色土と灰色土、灰色土が混じるオリーブ黒色土の3層である。オリーブ黒色土は柱痕である。遺物は出土していない。

ピット8 (図8) ピット7・10を切る。長径0.32m、短径0.2m、深さ0.3mを測る。埋土は黒色土、灰色土の2層である。遺物は土師器・須恵器・黒色土器が出土した。その内、2点を図示した(図10-25・26)。



図6 第1面平面図・遺構断面図(1)

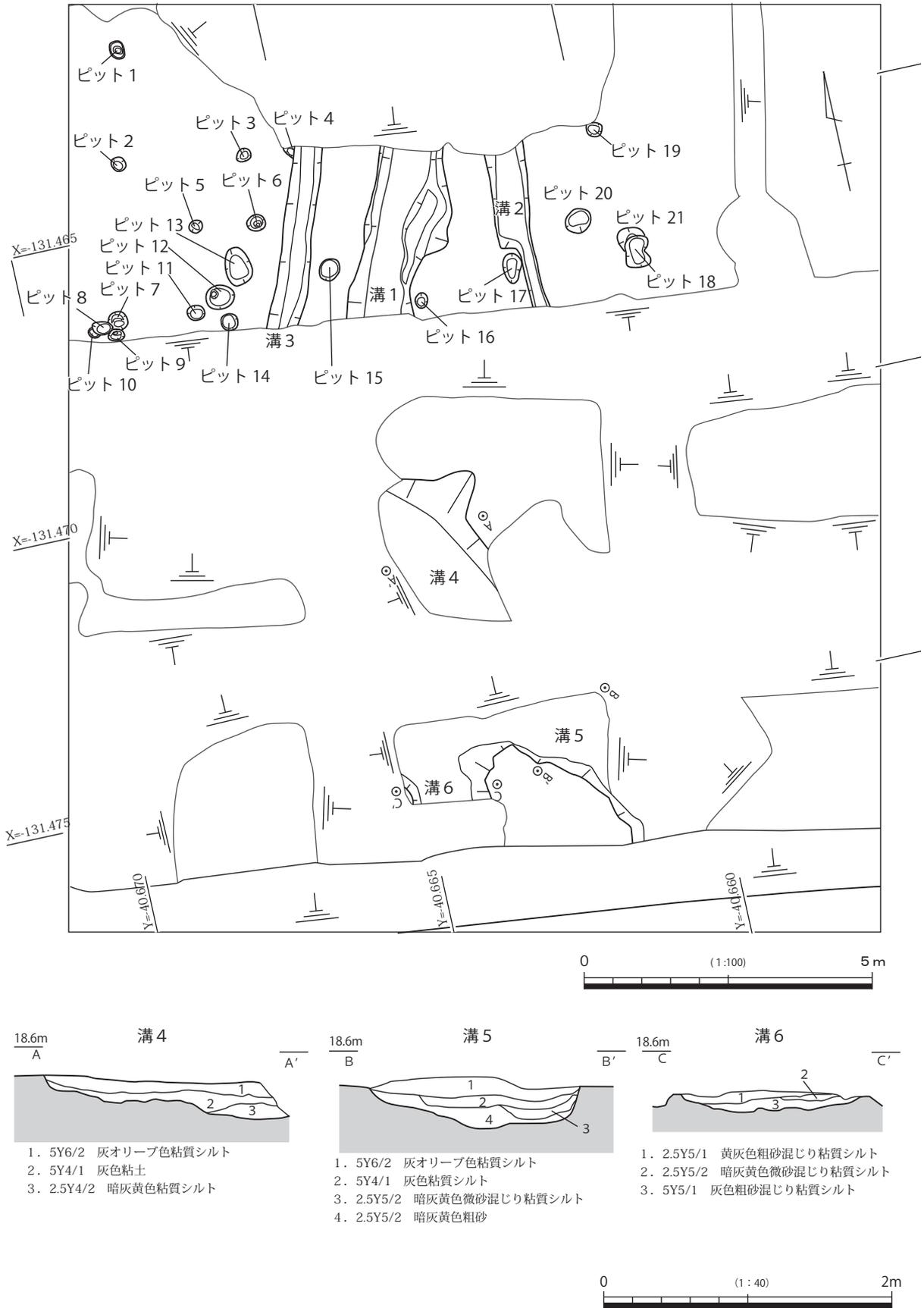


図7 第1面平面図・遺構断面図(2)

第三章 調査の成果

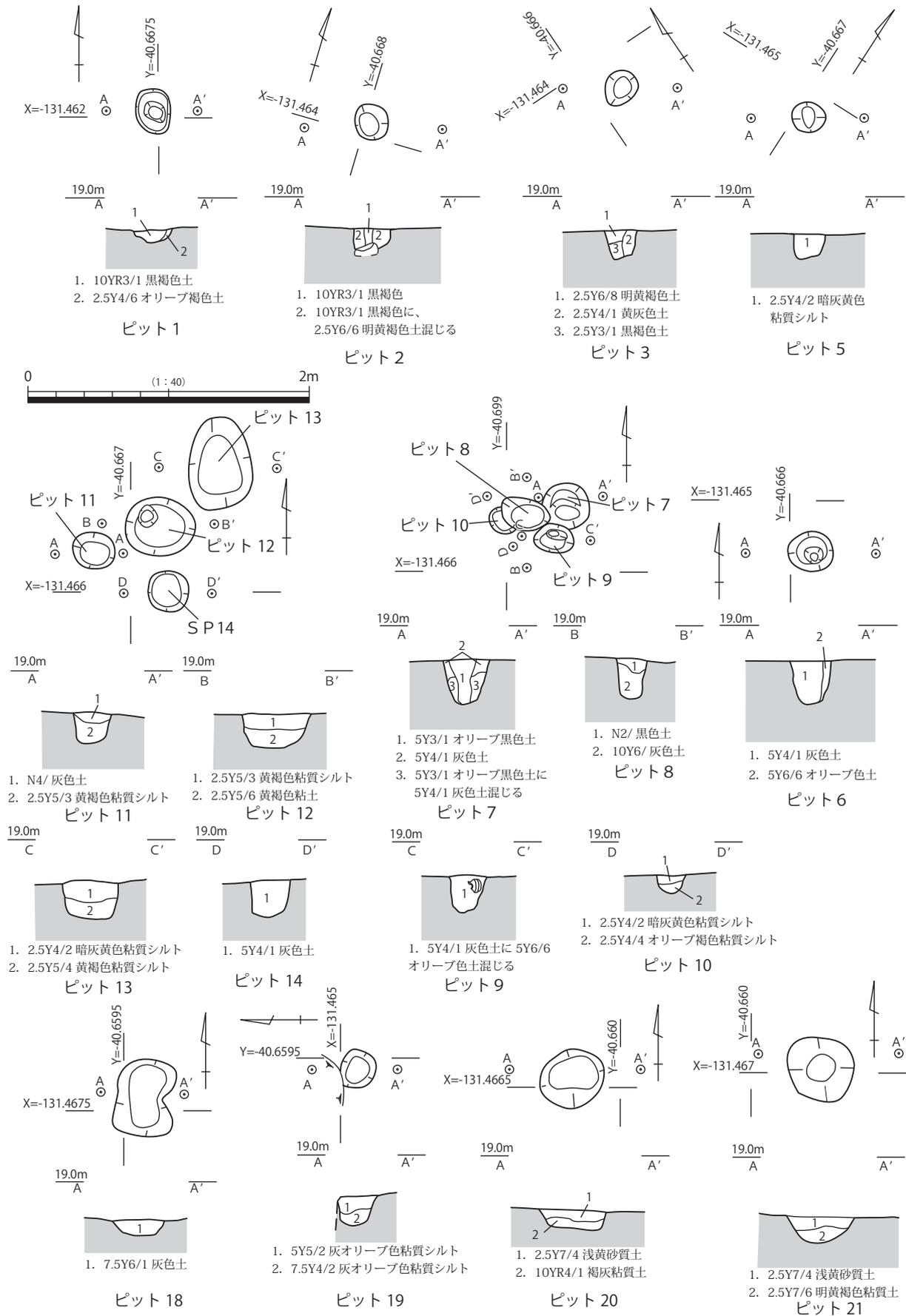


図8 第1面遺構平面図・断面図(1)

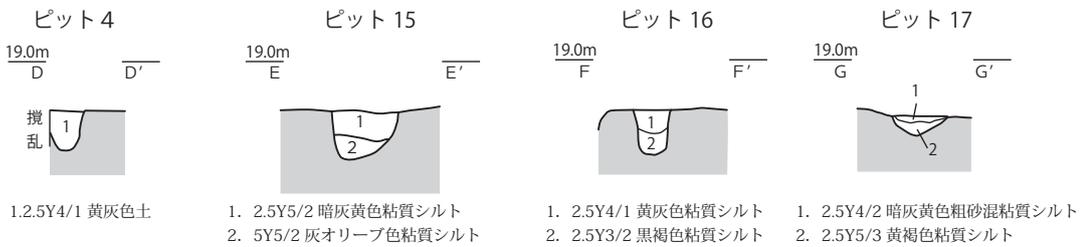
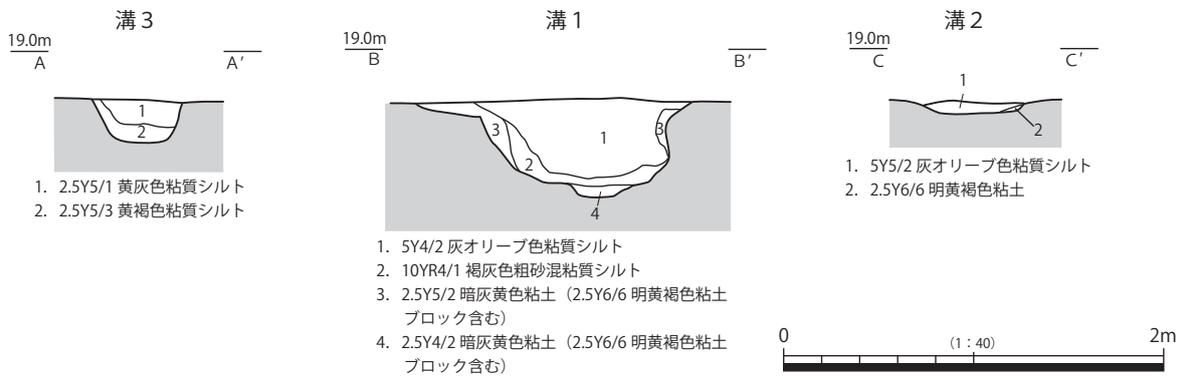
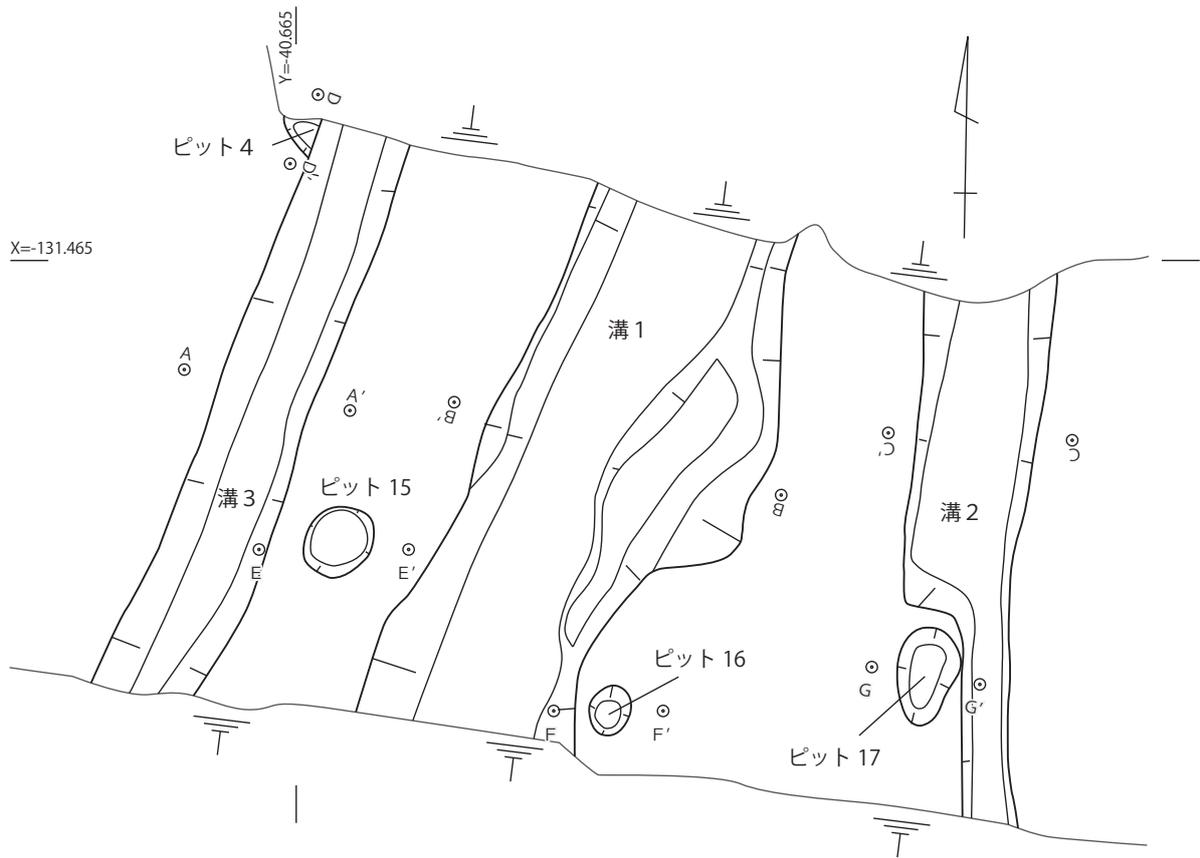


図9 第1面遺構平面図・断面図(2)

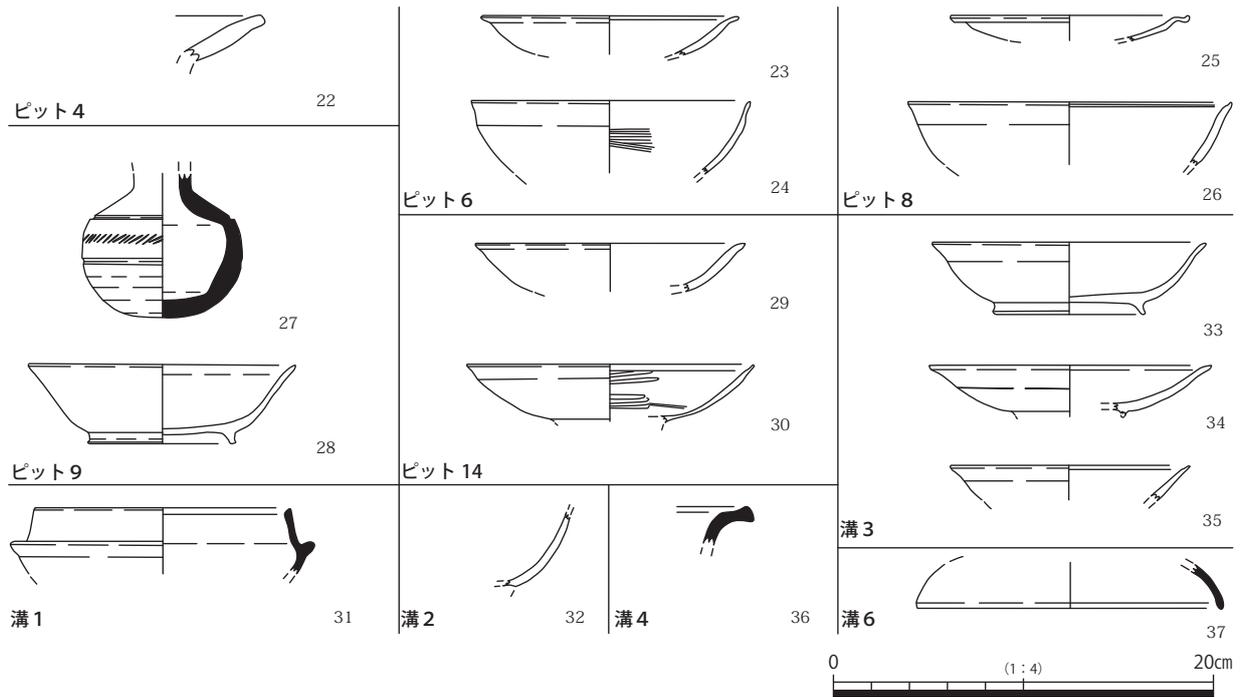


図10 第1面遺構出土遺物実測図

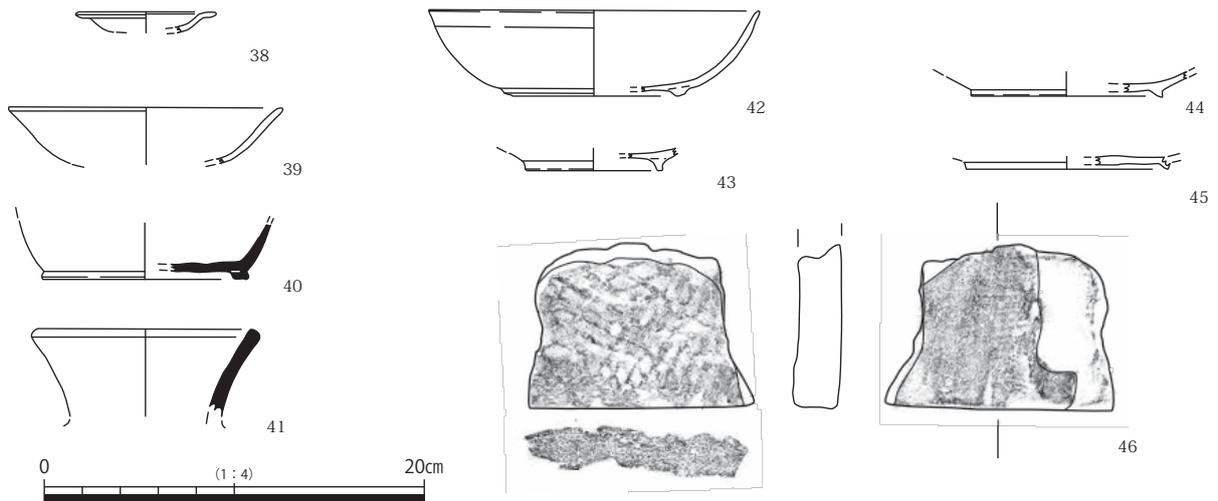


図11 5-1a層出土遺物実測図

25は土師器皿である。口径12.4cmを測る。水平に伸びる口縁部と短く立ち上がる口縁端部のいわゆる「て」字状口縁をもつ。

26は黒色土器碗A類である。口径17.0cmを測る。口縁端部内面は段をもつ。

ピット9(図8) ピット7を切る。長径0.28m、短径0.2m、深さ0.26mを測る。埋土はオリーブ色が混じる灰色土の単層である。遺物は土師器・須恵器・黒色土器が出土した。その内、2点を図示した(図10-27・28)。

27は須恵器甗である。体部最大径8.4cmを測る。丸みを帯びた体部と直立する頸部をもつ。体部外面に凹線2条とその間に刺突文を列状に施す。

28は土師器碗である。口径14.0cm、器高4.2cm、底径7.0cmを測る。断面台形状の高台をもつ。内外面にナデを施す。

ピット14(図8) 直径0.28m、深さ0.28mを測る。埋土は灰色土の単層である。遺物は土師器、黒

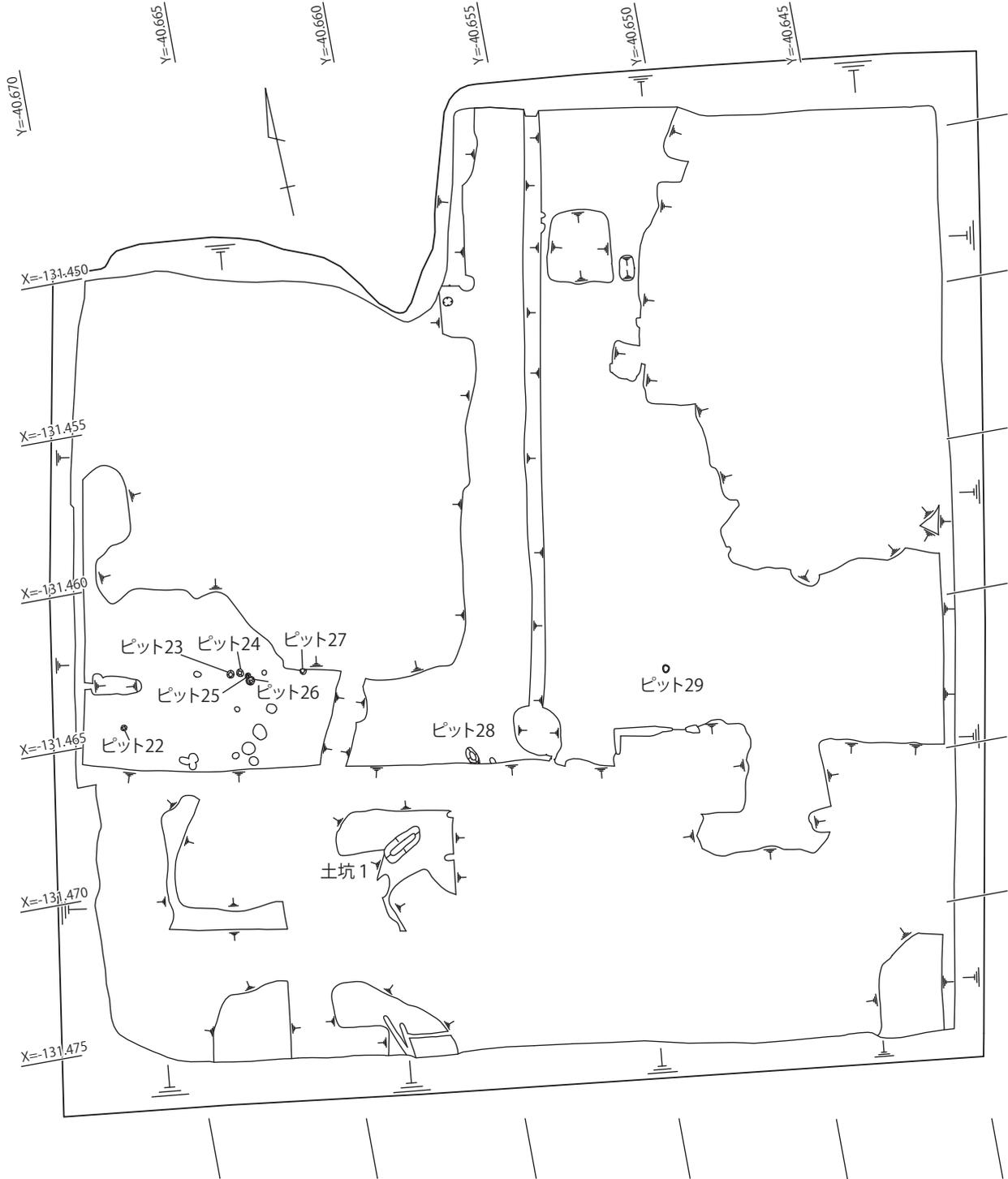


図12 第2面平面図

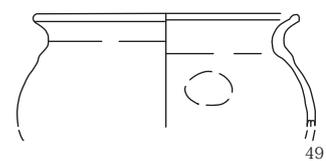
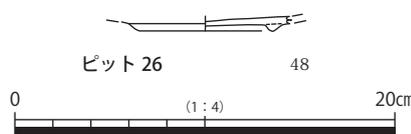
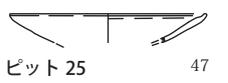


図13 第2面遺構出土遺物実測図

色土器が出土した。その内、2点を図示した(図10-29・30)。

29は土師器皿である。口径13.8cmを測る。口縁端部は外方へつまみ出す。

30は黒色土器碗A類である。口径15.2cmを測る。口縁端部内面に段をもつ。内面に不鮮明ながらミガキを施す。

溝 溝は南北方向2条、北東-南西方向2条、南西側で部分的に残存したもの3条を検出した。

溝1(図9) 溝3と並行して北東-南西方向に延びる。南北両側を攪乱に切られる。残存長2.84m、幅1.16~1.42m、深さ0.52mを測る。断面形状は台形状を呈し、埋土は灰オリーブ色粘質シルトを主体とする。遺物は土師器・須恵器・黒色土器が出土した。その内、1点を図示した(図10-31)。図化できた遺物は古墳時代中期の須恵器のみであるが、黒色土器も出土していることから、他の遺構と同様に10世紀代と考えられる。

31は須恵器杯身である。口径13.4cm、受部径16.0cmを測る。短く丸みを帯びた受部をもち口縁部は丸く収める。

溝2(図9) 溝1・3とはやや角度を違えて南北方向に延びる。南北方向を攪乱に切られる。残存長2.88m、幅0.26~0.62m、深さ0.06mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は灰オリーブ色粘質シルトを主体とする。遺物は土師器・須恵器・黒色土器が出土した。その内、1点を図示した(図10-32)。

32は黒色土器碗A類である。内面にミガキを施す。

溝3(図9) 溝1と並行して北東-南西方向に延びる。南北両側を攪乱に切られている。残存長3.22m、幅0.5m、深さ0.26mを測る。断面形状は台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質シルト、黄褐色粘質シルトの2層である。遺物は土師器が出土した。その内、3点を図示した(図10-33~35)。

33・34は土師器杯である。33は口径14.2cm、器高3.8cm、底径7.8cmを測る。口縁端部は外方へ開く。「ハ」字状を呈する高台をもつ。34は口径14.8cmを測る。口縁端部は外方へつまみ出す。高台の一部が残存する。

35は土師器皿である。口径12.6cmを測る。口縁端部はつまみ出し、器壁は極めて薄くなっている。

溝4(図7) 東肩の一部を検出した。残存長2.7m、残存幅1.8m、深さ0.28mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は灰オリーブ色粘質シルト、灰色粘土、暗灰黄色粘質シルトの3層である。遺物は土師器・須恵器が出土した。その内、1点を図示した(図10-36)。

36は須恵器甕である。残存高2.0cmを測る。口縁部は外方へ屈曲し、端部は面を成す。内外面に回転ナデを施す。

溝6(図7) 残存長1.3m、幅1.5m、深さ0.14mを測る。東側の溝5とは切りあっていると思われるが、断面観察で確認することはできなかった。埋土は黄灰色粗砂混じり粘質シルト、暗灰黄色微砂混じり粘質シルト、灰色粗砂混じり粘質シルトの3層である。遺物は土師器・須恵器が出土した。1点を図示した(図10-37)。

37は須恵器蓋である。口径16.0cmを測る。口縁端部はつまみ出す。内外面に回転ナデを施す。

5-1a層出土遺物(図11)

5-1a層からは土師器・須恵器・黒色土器・瓦が出土した。その内、9点を図示した(38~46)。1面で出土した遺物と大きな時期差は認められず、10世紀代と考えられる。

38・39は土師器である。38は皿である。口径7.0cmを測る。口縁部が水平に延び、端部は丸く収

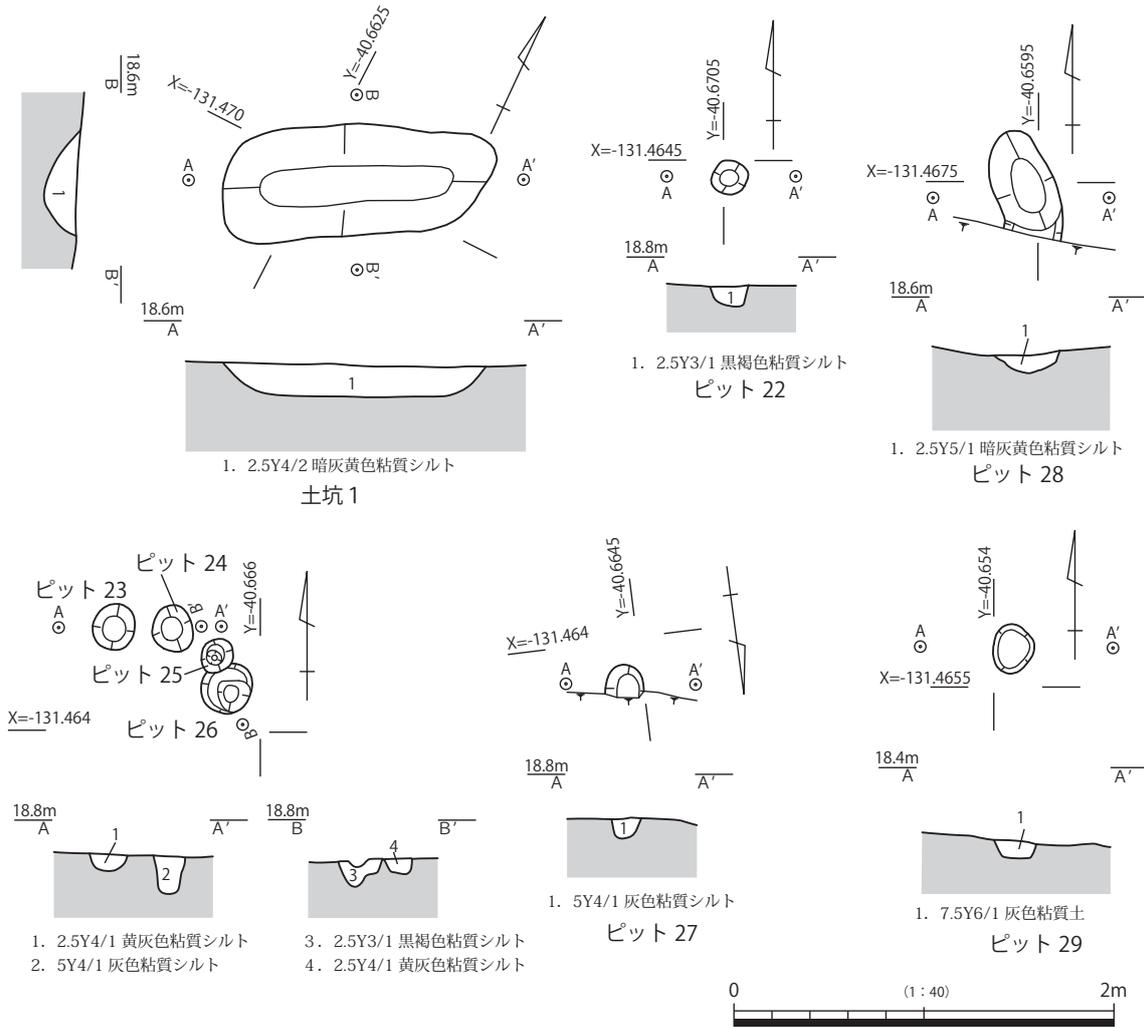


図 14 第 2 面遺構平面図・断面図

める。

39 は椀である。口径 14.4cm を測る。口縁部は丸く収める。

40・41 は須恵器である。40 は杯 B である。底径 10.8cm を測る。断面台形状の貼り付け高台をもつ。底部外面にナデ、体部内外面及び底部内面に回転ナデを施す。41 は壺である。口径 11.0cm を測る。緩やかに外方へ開く口縁部で、端部は丸く収める。内外面に回転ナデを施し、内面に自然釉がかかる。

42～45 は黒色土器椀 A 類である。42 は口径 17.4cm、器高 4.5cm、底径 8.6cm を測る。断面台形状の低い高台をもつ。口縁部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、端部は丸く収める。体部内面にミガキを施すが、磨滅のため単位は不明である。体部外面にナデ、口縁部外面にヨコナデを施す。43 は底径 7.0cm を測る。断面台形状の高台をもつ。44 は底径 10.0cm を測る。断面三角形状の高台をもつ。45 は底径 10.6cm を測る。断面三角形状の高台をもつ。

46 は平瓦である。残存幅 11.8cm、残存長 8.5cm、厚さ 2.1cm を測る。端面が一箇所残存する。凹面に布目圧痕、凸面に格子目タタキが認められる。

第 2 面の遺構・遺物

ピット 8 基、土坑 1 基を検出した。各遺構の平面・断面図は図 12・15 に掲載したが、特徴的な遺構及び、出土遺物を掲載した遺構についてのみ以下で詳述する。その他の遺構については規模等を表 3 に

第三章 調査の成果

記載する。ただし、第2面の遺構は遺物の出土量が少なく、9世紀～10世紀頃と考えられる。

ピット ピットは散在した状態で建物としてのまとまりは把握できない。

ピット25 (図14) 直径0.18m、深さ0.08mを測る。埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。遺物は土師器が出土した。その内、1点を図示した(図13-47)。

47は土師器皿で、口径10.4cmを測る。口縁端部内面をつまみ上げる。

ピット26 (図14) 直径0.28m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトの単層である。遺物は土師器が出土した。その内、2点を図示した(図13-48・49)。

48・49は土師器である。48は椀である。断面三角形の高台をもつ。底径7.0cmを測る。内外面にナデを施す。49は甕である。口径15.4cmを測る。口縁部は外方へ屈曲して延びる。端部内面は僅かに窪み、丸く収める。体部内面に指頭圧痕が認められる。内外面に煤が付着する。

土坑1 (図14) 長径1.4m、短径0.6m、深さ0.16mを測る。埋土は暗灰黄色粘質シルトの単層である。遺物は出土していない。

IV章 総括

今回の調査は、下穂積遺跡発見の端緒となった。攪乱の影響が大きく、遺構の残存状態は良好ではなかったが、9～10世紀を中心とする遺跡の様相が確認できた。

遺構はその性格を明らかにできなかったが、溝1は規模が大きく、深さ0.52mを測り、西側の溝3と並行して延びていた可能性もある。溝3の西側でピットが多く検出されたことから、区画溝として掘削された可能性も考えられる。

遺物は包含層中の破片資料ではあるが、摂津C型羽釜（菅原1983）や灰釉陶器が出土していることは注意される。摂津C型羽釜はその名称の通り摂津を中心に分布する器種である。摂津以外では、当時の国の中心である平安京や、摂津と平安京の間に位置する山城国乙訓地域でも多数出土している。また、淀川南岸地域の河内国でも若干量が出土している。

摂津国内では特に三島地域の分布密度が高いことが指摘されており（福島2001・2003）、本遺跡も一例を追加することとなった。

灰釉陶器は僅か一例ではあるが、東海地方産の広域に流通した品種であり（山下1995）、本遺跡がその流通経路の末端に位置していたことを示している。

また、古墳時代及び8・12世紀の遺物を含むことから、周辺にこの時期の遺構が存在する可能性もある。当遺跡の周辺には東に接して三島街道が南北方向に延び、東側に松ヶ本北遺跡、北側に中穂積遺跡が所在する。松ヶ本北遺跡では古墳・古代・中世の各時代の遺構・遺物が確認され、中穂積遺跡では古代の遺構・遺物が確認されている。しかし、いずれの遺跡も調査例が少なく、その様相は不明な点が多い。これまで遺跡の分布が稀薄な地域であるが、今後、古代・中世を中心とする遺構が確認される可能性があることを示した調査といえよう。

[参考文献]

菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』同朋舎

福島正和 2001 「考察 「摂津C型羽釜考」」『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』財団法人 大阪府文化財調査研究センター

福島正和 2003 「摂津C型羽釜とその周辺」『續文化財学論集』文化財学論集刊行会

山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

表1 出土遺物観察表(1)

遺物番号	図版番号	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
1	4-2	4-1a層	土師器	椀	器高:△1.2 底径:(7.0)	底部1/6	外:7.5YR7/4にぶい橙 内・断:10YR7/3にぶい黄	砂粒を多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	
2	4-2	4-1a層	土師器	皿	口径:(15.0) 器高:1.8 底径:(13.0)	口縁部1/8	外:2.5Y6/3にぶい黄 内:2.5Y7/2灰黄 断:2.5Y6/2灰黄	砂粒を多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	口縁内面に凹線1条
3	4-1	4-1a層	須恵器	蓋	口径:(16.0) 器高:△0.8	口縁部1/6	外・内・断:N7/灰白	密	内外面:回転ナデ	
4	4-1	4-1a層	須恵器	杯	器高:△2.1 底径:(10.8)	底部1/6	外・内・断:10Y7/1灰白	密	内外面:回転ナデ	
5	4-1	4-1a層	須恵器	杯	器高:△1.4 底径:(12.6)	底部1/5	外:N6/灰 内:N5/灰 断:10YR5/1褐灰	密	内外面:回転ナデ	
6	4-1	4-1a層	須恵器	杯	口径:(15.8) 器高:△3.2	口縁部1/6	外・内・断:N6/灰白色	密	内外面:回転ナデ	
7	4-1	4-1a層	須恵器	壺	器高:△2.4 底径:(6.6)	底部1/4	外・内・断:5Y7/1灰白	密	内外面:回転ナデ 底面:ヘラ切り	
8	4-1	4-1a層	須恵器	壺	器高:△3.3 底径:(10.2)	底部1/4	外:7.5YR5/1灰 内・断:N7/灰白	密	内外面:回転ナデ	
9	4-1	4-1a層	須恵器	壺	口径:(19.0) 器高:△1.5	口縁部1/8	外・内:10Y6/1灰 断:7.5Y6/1灰	密	内外面:回転ナデ	
10	4-1	4-1a層	須恵器	壺	口径:(10.2) 器高:△2.2	口縁部1/6	外:7.5Y7/1灰白 内・断:N7/灰白	密	内外面:回転ナデ	
11	4-1	4-1a層	須恵器	甗	口径:不明 器高:△3.2	不明	外:N7/灰白 内:N6/灰 断:7.5Y7/1灰白	密	内外面:回転ナデ	内面に自然釉がかかる
12	4-2	4-1a層	黒色土器	椀	器高:△1.8 底径:(9.2)	底部1/6	外:2.5Y7/2灰黄 内:10Y3/1オリブ黒 断:5Y8/1灰白	砂粒多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	A類
13	4-2	4-1a層	黒色土器	椀	口径:(14.0) 器高:△3.1	口縁部1/12	外・内・断:7.5Y4/1灰	密	外面:ナデ 内面:ナデ・ミガキ	B類 口縁部に沈線1条
14	4-2	4-1a層	黒色土器	椀	口径:不明 器高:△2.5	不明	外:7.5Y3/1オリブ黒 内・断:7.5Y4/1灰	砂粒僅かに含む	内外面:摩滅のため調整不明	B類 口縁部に沈線1条
15	4-2	4-1a層	灰釉陶器	皿	口径:不明 器高:△3.0	不明	外:2.5Y8/1灰白 内:7.5Y7/2灰白 断:5Y8/1灰白	密	内外面:回転ナデ 外面:施釉	
16	4-2	4-1a層	土師質土器	羽釜	口径:(13.0) 器高:△2.8	口縁部1/6	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:2.5Y6/3にぶい黄 断:7.5YR5/4にぶい褐	砂粒多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	
17	4-2	4-1a層	土師質土器	羽釜	口径:不明 器高:△4.6	不明	外:2.5Y6/2灰黄 内:2.5Y5/2暗灰黄 断:10YR6/4にぶい黄橙	砂粒多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	
18	4-2	4-1a層	土師質土器	羽釜	口径:不明 器高:△4.0	不明	外:10YR8/3浅黄橙 内:2.5Y7/3浅黄 断:2.5Y7/2灰黄	砂粒を多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	
19	4-2	4-1a層	土師質土器	羽釜	口径:不明 器高:△2.8	不明	外・内:2.5Y6/2灰黄 断:2.5Y7/1灰白	砂粒を多く含む	内外面:ナデ	
20	4-2	4-1a層	土師質土器	羽釜	口径:不明 器高:△4.4	不明	外・内:5YR6/6橙 断:7.5YR6/6橙	砂粒を多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	
21	4-2	4-1a層	瓦質土器	羽釜	口径:(19.2) 器高:△3.9	口縁部1/12	外:10Y5/1灰 内:5Y4/1灰 断:2.5Y7/3浅黄	砂粒を多く含む	外面:ナデ 内面:ハケ	外面に凹線
22	5-1	ピット4	土師器	甗	口径:不明 器高:△2.4	不明	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:2.5Y6/2灰黄 断:2.5Y7/1灰白	精良	内外面:ヨコナデ	
23	5-1	ピット6	土師器	皿	口径:(13.6) 器高:△2.1	口縁部1/8	外・断:10YR7/3にぶい黄橙 内:10YR8/2灰白	密	内外面:ヨコナデ	
24	5-1	ピット6	黒色土器	椀	口径:(14.8) 器高:△3.8	口縁部1/20	外:2.5Y8/2灰白 内:N2/黒 断:7.5Y8/1灰白	砂粒を少量含む	口縁部:ヨコナデ 外面:摩滅のため調整不明 内面:ミガキ	A類
25	5-1	ピット8	土師器	皿	口径:(12.4) 器高:△1.3	口縁部1/16	外・断:2.5Y8/2灰白 内:10YR8/1灰白	密	内外面:摩滅のため調整不明	
26	5-1	ピット8	黒色土器	椀	口径:(17.0) 器高:△3.3	口縁部1/12	外:5YR4/1褐灰 内:2.5Y4/1黄灰 断:2.5Y6/1黄灰	砂粒を少量含む	内外面:摩滅のため調整不明	
27	5-1	ピット9	須恵器	甗	体部径:8.4 器高:△8.3	体部1/2	外・断:N7/灰白 内:N6/灰	密	外面:ナデ、回転ケズリ 内面:ナデ、回転ナデ	外面に凹線2条、刺突文
28	5-1	ピット9	土師器	椀	口径:(14.0) 器高:4.2 底径:(7.0)	1/4	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR7/2にぶい黄橙 断:10YR8/2灰白	砂粒を多く含む	内外面:ナデ	
29	5-1	ピット14	土師器	皿	口径:(13.8) 器高:△2.5	口縁部1/12	外:7.5YR8/4浅黄橙 内・断:10YR8/3浅黄橙	砂粒を多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	

表2 出土遺物観察表(2)

挿図 番号	図版 番号	出土地	器種	器形	法量(cm)	残存	色調	胎土	調整	備考
30	5-1	ピット 14	黒色 土器	椀	口径:(15.2) 器高:△3.1	口縁部 1/6	外:2.5Y8/2灰白 内:N2/黒 断:7.5Y8/1灰白	砂粒を多く含む	外面:ヨコナデ、摩滅のため調整不明 内面:ヨコナデ、ミガキ	A類
31	5-2	溝1	須恵器	杯身	口径:(13.4) 器高:△3.5	口縁部 1/6	外・内・断:N6/灰	密	内外面:ナデ	
32	5-2	溝2	黒色 土器	椀	口径:不明 器高:△3.9	不明	外:10YR8/3浅黄橙 内:N2/黒 断:5Y8/1灰白	砂粒を少量含む	外面:摩滅のため調整不明 内面:ミガキ?	A類
33	5-2	溝3	土師器	杯	口径:(14.2) 器高:3.8 底径:(7.7)	2/3	外:5Y8/1灰白、N4/灰 内・断:2.5Y8/1灰白	砂粒を多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	
34	5-2	溝3	土師器	杯	口径:(14.8) 器高:△2.7	1/4	外:7.5Y8/1灰白 内・断:5Y8/1灰白	砂粒を多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	
35	5-2	溝3	土師器	皿	口径:(12.6) 器高:△1.8	1/6	外:2.5Y8/1灰白 内:10YR7/4にぶい黄橙 断:10YR8/1灰白	砂粒を多く含む	内外面:摩滅のため調整不明	
36	5-2	溝4	須恵器	甗	口径:不明 器高:△2.0	不明	外・断:7.5Y7/1灰白 内:N6/灰	密	内外面:回転ナデ	
37	5-2	溝6	須恵器	蓋	口径:(16.0) 器高:△2.4	口縁部 1/8	外・内:N6/灰 断:N8/灰白	密	内外面:回転ナデ	
38	6-1	5-1a層	土師器	皿	口径:(7.0) 器高:△1.1	1/8	外・断:2.5Y7/2灰黄 内:2.5Y6/2灰黄	密	内外面:摩滅のため調整不明	
39	6-1	5-1a層	土師器	椀	口径:(14.4) 器高:△3.0	口縁部 1/4	外:10YR7/2黄橙 内・断:10YR8/2灰白	密	内外面:摩滅のため調整不明	
40	6-1	5-1a層	須恵器	杯	器高:△3.1 底径:(10.8)	底部1/4	外:10Y6/1灰 内・断:N6/灰	密	内外面:回転ナデ	
41	6-1	5-1a層	須恵器	壺	口径:(11.0) 器高:△4.6	口縁部 1/6	外:10Y4/1灰 内:10Y6/1灰 断:5RP6/1紫灰	密	内外面:回転ナデ	内面に自然釉かかる
42	6-1	5-1a層	黒色 土器	椀	口径:(17.4) 器高:4.5 底径:(8.6)	1/8	外:10YR8/2灰白 内:N2/黒 断:2.5Y8/2灰白	砂粒を多く含む	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ・ミガキ	
43	6-1	5-1a層	黒色 土器	椀	器高:△1.2 底径:(7.0)	底部1/6	外:2.5Y8/2灰白 内:7.5Y3/1オリーブ黒 断:7.5Y8/1灰白	密	内外面:摩滅のため調整不明	
44	6-1	5-1a層	黒色 土器	椀	器高:△1.1 底径:(10.0)	底部1/4	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:7.5Y2/1黒 断:5Y8/1灰白	密	内外面:摩滅のため調整不明	
45	6-1	5-1a層	黒色 土器	椀	器高:△0.7 底径:(10.6)	底部1/6	外:7.5YR6/6橙 内:7.5Y2/1黒 断:2.5Y7/2灰黄	密	内外面:摩滅のため調整不明	
46	6-1	5-1a層	瓦	平瓦	幅:△11.8 長さ:△8.5 厚:2.1	不明	凹面:10YR6/4にぶい黄橙 凸面・断:2.5Y7/3浅黄	砂粒を多く含む	凹面:布目圧痕 凸面:格子目タタキ	
47	6-2	ピット 25	土師器	皿	口径:(10.4) 器高:△1.5	口縁部 1/8	外・断:2.5Y8/2灰白 内:7.5YR7/4にぶい橙	密	内外面:摩滅のため調整不明	
48	6-2	ピット 26	土師器	椀	器高:△0.5 底径:(7.0)	底部1/6	外:10YR8/2灰白 内・断:2.5Y8/2灰白	密	内外面:ナデ	
49	6-2	ピット 26	土師器	甗	口径:(15.4) 器高:△6.0	口縁部 1/4	外:10YR4/1褐灰 内:5Y3/1オリーブ黒 断:5Y5/1灰	砂粒を少量含む	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、指頭圧痕	内外面煤付着

表3 検出遺構一覧表

遺構面	遺構名	規模 (m)			遺物
		長さ	幅	深さ	
第1面	ビット1	0.30	0.25	0.1	
	ビット2	0.26	0.26	0.14	
	ビット3	0.26	0.22	0.2	
	ビット4	0.24以上	0.2以上	0.22	土師器
	ビット5	0.26	0.2	0.2	
	ビット6	0.33	0.26	0.3	土師器・須恵器・黒色土器
	ビット7	0.34	0.34	0.32	
	ビット8	0.32	0.2	0.3	土師器・須恵器・黒色土器
	ビット9	0.28	0.2	0.26	土師器・須恵器・黒色土器
	ビット10	0.2	0.16	0.12	
	ビット11	0.3	0.24	0.22	土師器・須恵器
	ビット12	0.5	0.4	0.24	
	ビット13	0.65	0.45	0.28	
	ビット14	0.28	0.28	0.28	土師器・黒色土器
	ビット15	0.4	0.34	0.38	
	ビット16	0.24	0.24	0.28	土師器
	ビット17	0.5	0.34	0.1	
	ビット18	0.54	0.4	0.1	
	ビット19	0.26	0.26	0.24	
	ビット20	0.44	0.44	0.1	
	ビット21	0.48	0.44	0.2	
	溝1	2.84以上	1.42	0.52	土師器・須恵器・黒色土器
	溝2	2.88以上	0.62	0.06	土師器・須恵器・黒色土器
	溝3	3.22以上	0.5	0.26	土師器
	溝4	2.7以上	1.8以上	0.28	土師器・須恵器
	溝5	3.0以上	1.5以上	0.34	
	溝6	1.3以上	1.5	0.14	土師器・須恵器
	溝7	4.8	0.3	0.12	土師器・須恵器
第2面	ビット22	0.2	0.18	0.1	
	ビット23	0.26	0.22	0.1	
	ビット24	0.24	0.24	0.2	
	ビット25	0.18	0.18	0.8	土師器
	ビット26	0.28	0.28	0.14	土師器
	ビット27	0.20	0.18以上	0.1	
	ビット28	0.54以上	0.3	0.08	
	ビット29	0.24	0.22	0.1	
	土坑1	1.4	0.6	0.16	

写 真 图 版



1. 調査区遠景（南東から）



2. 第2面全景（西から）



1. 東壁土層断面
(西から)



2. 西壁土層断面
(東から)



3. 第1面遺構集中部
完掘状況 (東から)

1. 第1面遺構集中部
完掘状況（北から）

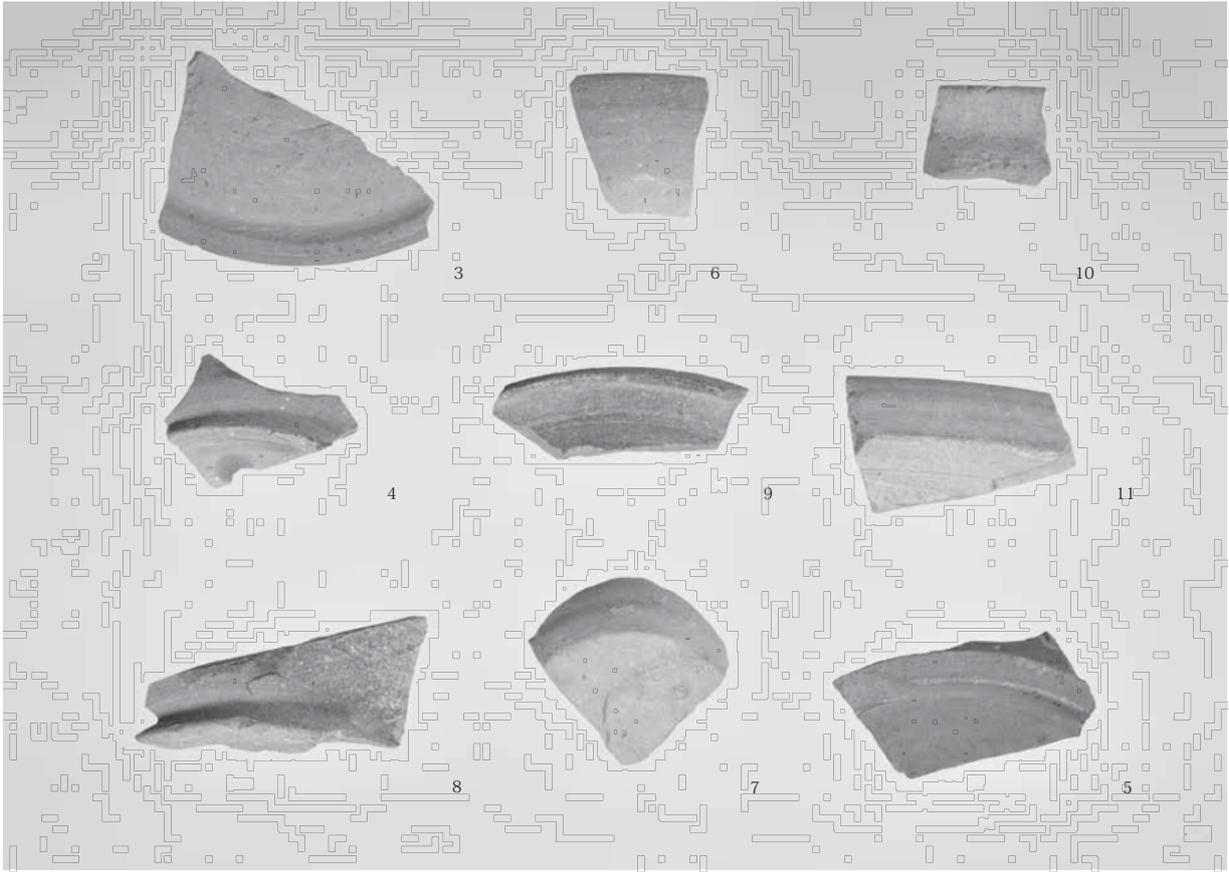


2. ピット16断面
（南から）

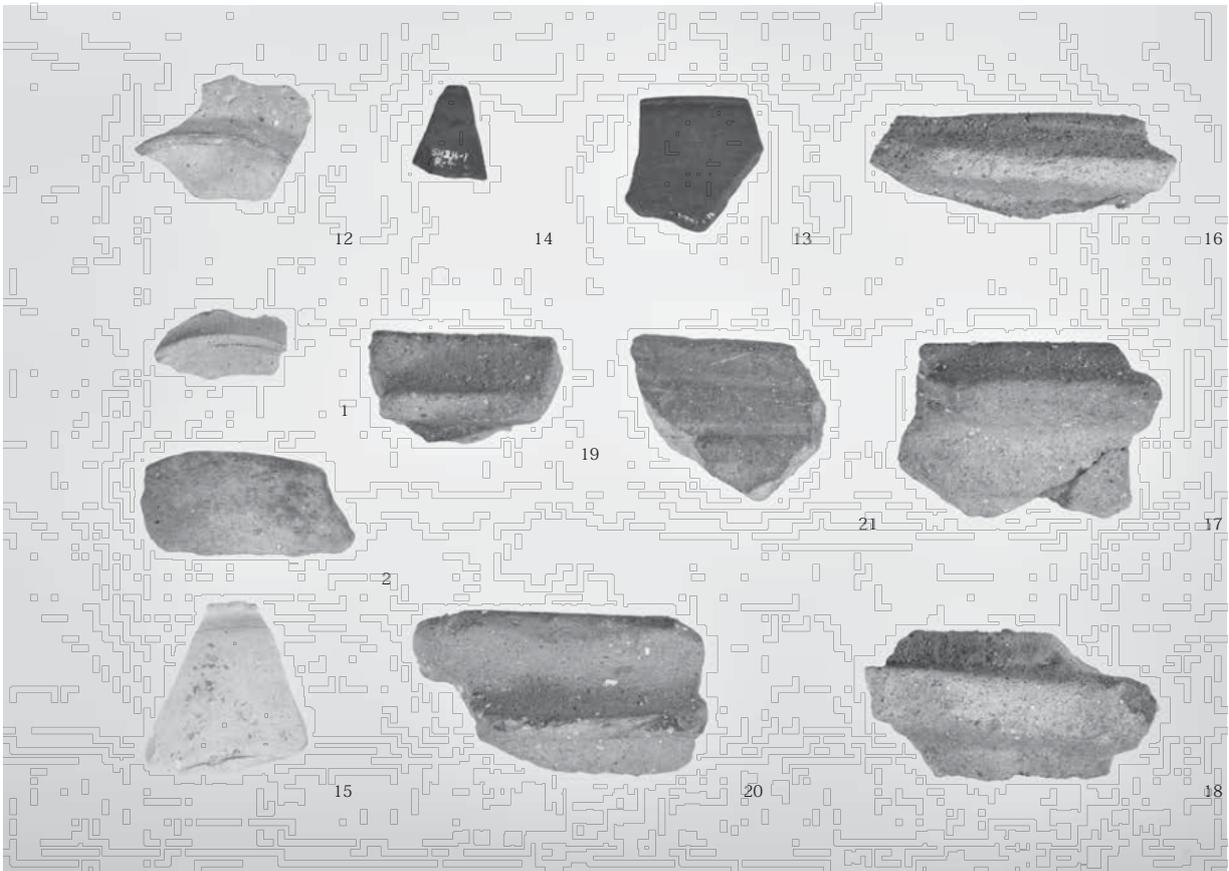


3. 溝6断面（西から）

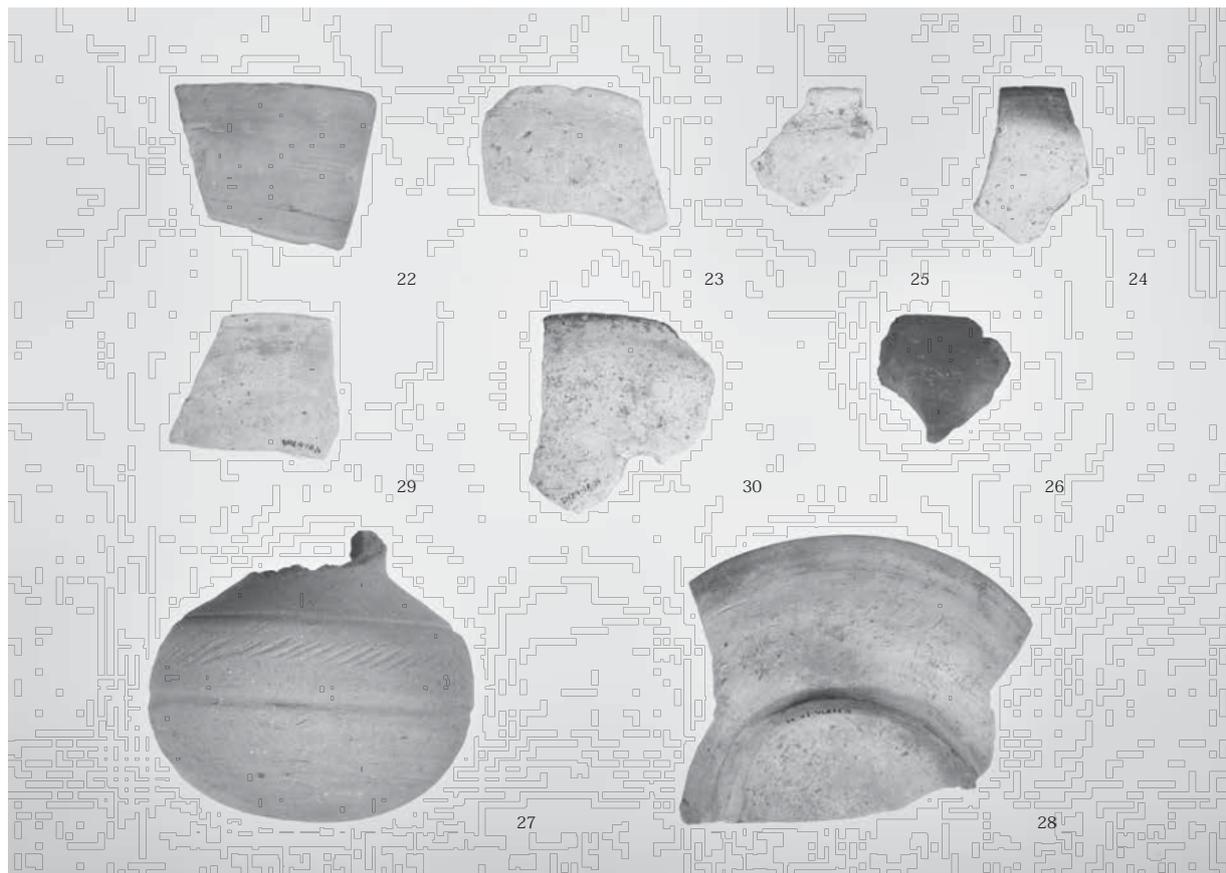




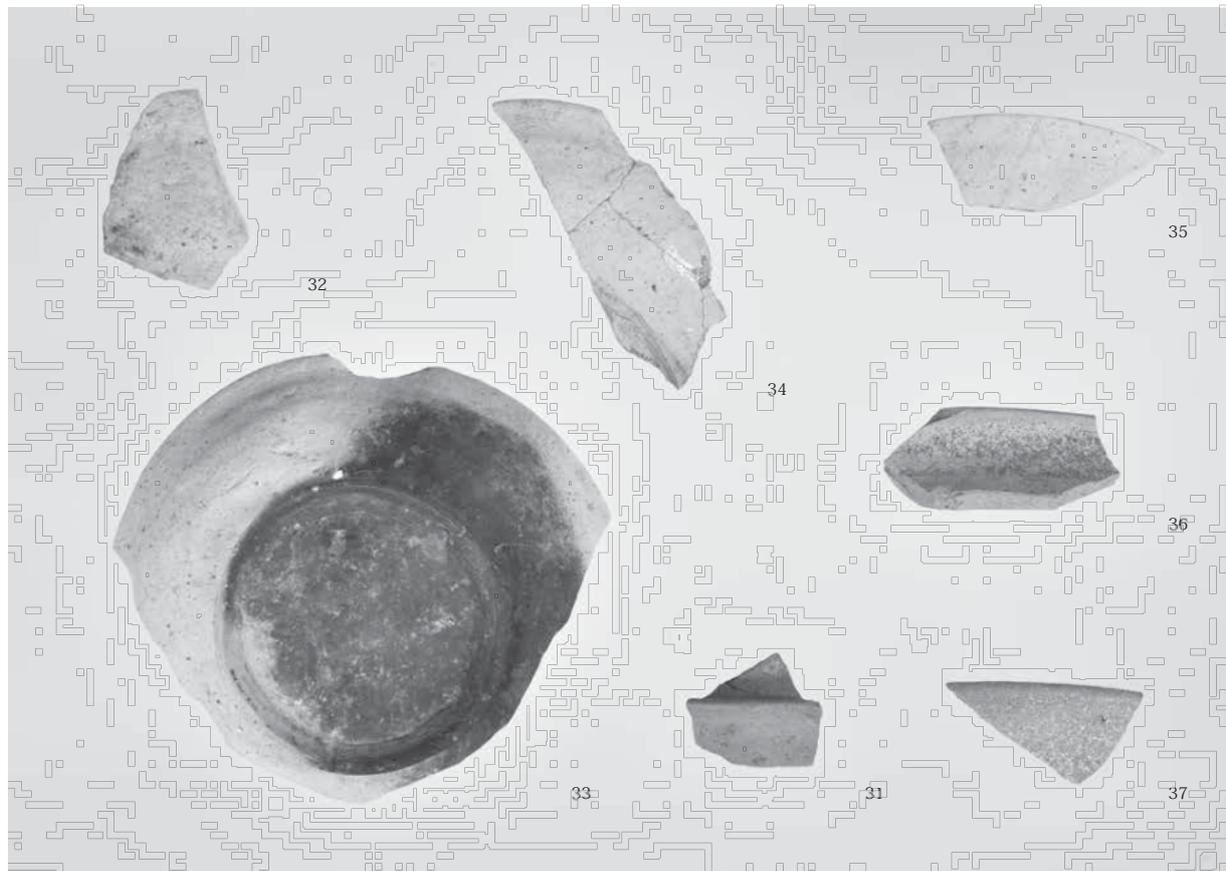
1. 4-1a 層出土遺物 (須恵器)



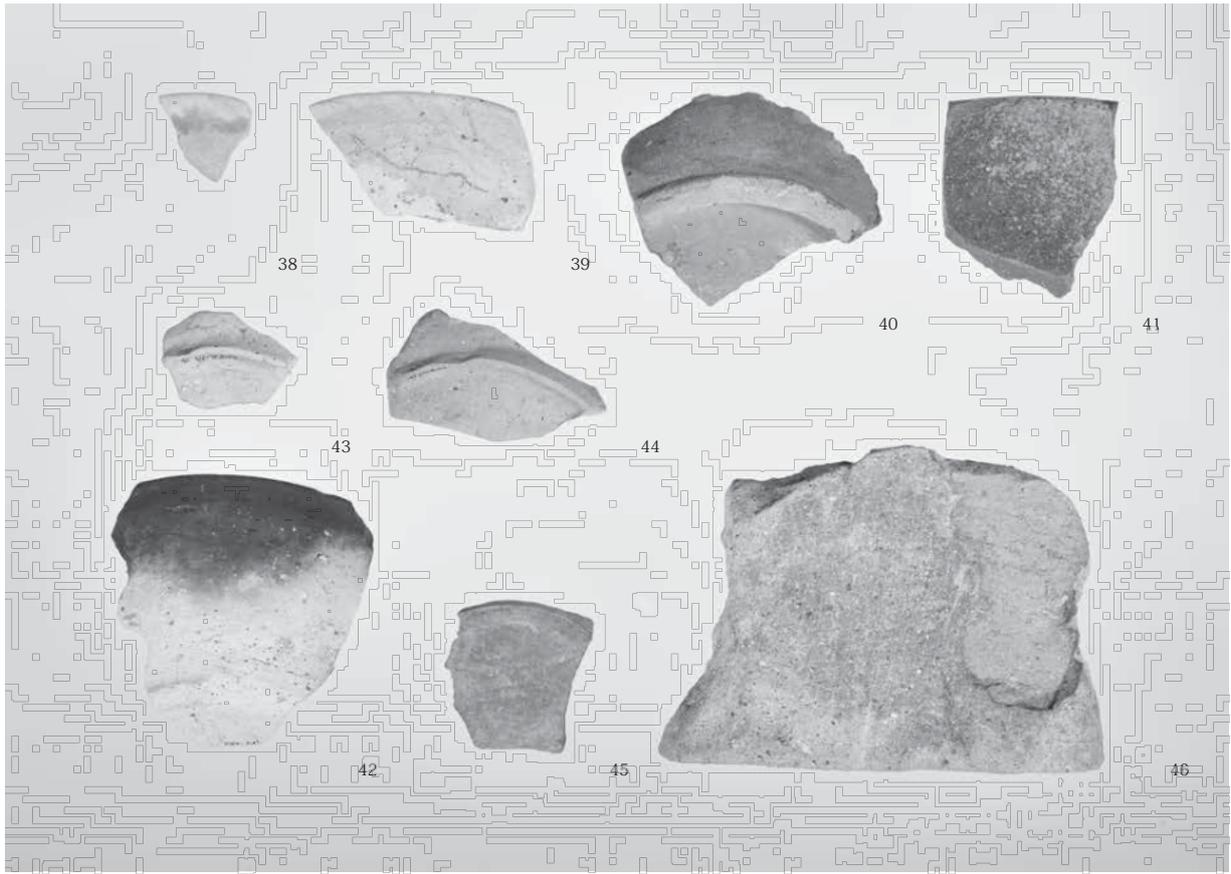
2. 4-1a 層出土遺物 (土師器ほか)



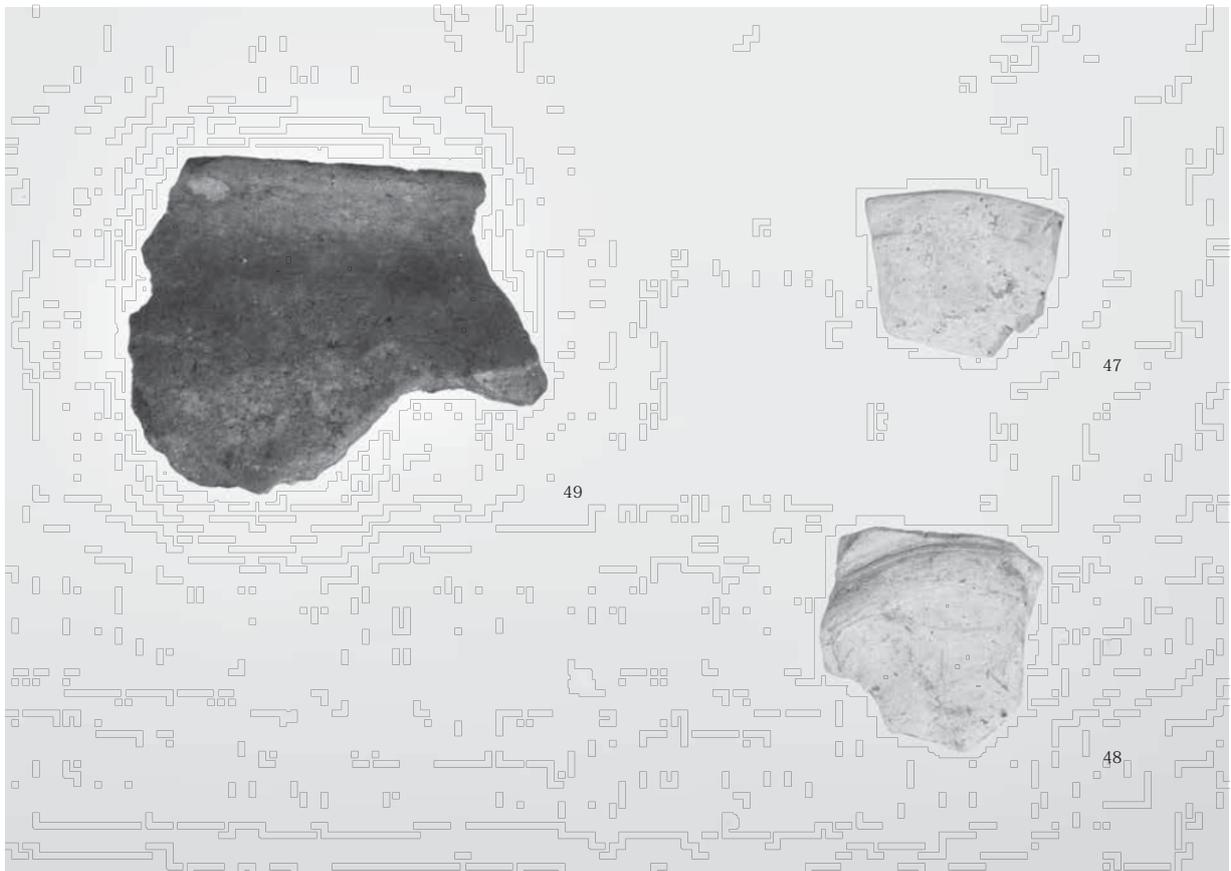
1. 第1面ピット出土遺物



2. 第1面溝出土遺物



1. 5-1a層出土遺物



2. 第2面遺構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しもほづみいせき いち							
書名	下穂積遺跡1							
副書名								
巻次名								
シリーズ名	茨木市文化財資料集							
シリーズ番号	第75集							
編著者名	木村健明							
編集機関	茨木市教育委員会							
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号 電話 (072) 622-8121 (代表)							
発行年月日	2020 (令和2) 年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもほづみいせき 下穂積遺跡	おおさかふいほづみいせき 大阪府茨木市 しもほづみさんちようめ 下穂積三丁目	27211	—	34°81'41"	135°55'55"	H26.4.14 ～ H26.5.28	990㎡	事務所建築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
しもほづみいせき 下穂積遺跡	集落	平安時代	溝 土坑 ピット		土師器・須恵器・ 黒色土器・瓦			
要約	<p>下穂積遺跡は、今回の工事に伴って新規発見された遺跡である。調査の結果、10世紀代を中心とした遺構が確認された。周辺はこれまで遺跡の空白地となっていた地域である。</p> <p>今回の結果から、三島街道の隣接地に当該期の遺跡が存在したことが確認された。</p>							

茨木市文化財資料集 第75集

下穂積遺跡 1

発行日 令和2年3月31日

編集 茨木市教育委員会

〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

電話 (072) 622-8121 (代表)

発行 茨木市教育委員会

印刷 株式会社トゥユー